

北海道大学工学部 小林 三 樹

水は本来地縁的存在であり、地域の水の条件に整合した生活と生業の型が生活の智恵として形成されていた。そのルール（本論の共生的関係）を賛美せずに桎梏と位置づけ脱却を指向したところに文明化、近代化への希求があった。他域で涵養された水資源への依存で成立つその近代水道システムが、都市の財力技術力をもっても打破しえないだけ強力な資源・エネルギー・社会の制約にぶつかった時、水は豊富で当り前という社会通念を破り新たなルールを定着させるもがきと実験を必要とする。本論文の一般部分は水供給力に対して過度の需要が集中した圏域で採りうる水生活形態を考えてそれに備える研究として重要である。いかなる用水密度はいかなる基盤施設と人間行動のうでで成立ちうるかを明示し、セツルメント計画が低熟度の段階から水環境要素を同一土俵に持込んで計画を進めうるようにした点で有意義である。しかし、3節以降は常識水量の1/3の供給（補給）で団地を造成する場合という具体的事例が念頭におかれているのと膨大な検討資料の大幅な圧縮のためか難解である。奔放な水使用に慣れた人々が節水システムを受容するには体験が社会通念の変化が前提になる。農業水利権が異常時緊急時の配分序列として秩序づけられてきたように、都市住民も外乱（渇水等）による困窮を体験しつつ現体系からより渇水耐性のあるシステムの方向へ通念が徐々に変化するのを待つしかないだろう。本論では自らの水代謝を理性のもとに管理しうる「高度な市民」の育成を目標にしている。通念が変わらないままでは節水と水循環を義務づけられた特定の実験団地にわざわざ住む人があるか。水資源量の物理的限界が明白で、それは水源開発努力の欠除といった他に責のあるものではなく、かつ、住宅需要が循環使いを嫌う余地を残さないまで熾烈ならば、両者の強さで決る必然性が、外部依存～自足の間でシステムを選択する結果になるであろう。それでも計画者は人々の選好の変化に先んじて施設を準備しなければならないから、代替案の評価選択システムに科学化が追求される理由であり、演者が苦渋された所以であろう。筆者は若干の質問を羅列させて戴くに留める。

1. 代替案評価はいかなる特性を備えた人によるのが適切か。開発行為が人々に忌避された時に財政リスクを背負い非難を受ける当事者と、受けない計画者は、代替案選択プロセスにあってどのように位置づけられるか。
2. 居住者のある行動の持続を前提に施設化する場合、人々の行動に計画者はどのように介入しうるか。そして施設機能が担保されるか。不特定住民の将来のライフスタイルの予測不確定性をいかに扱うか。
3. 近隣の社会通念より進んだ節水実験団地への入居募集にいかなる入居魅力と見返りを用意できるか。
4. 代替案セット3～5はいかなる条件の時にセット1よりも安定性、分譲価格等の点で有利になるか。
5. 費用便益関係の図-3, 4はどのように読むのかご説明願いたい。費用効果分析における費用として恐らく節水の気苦労、持出し労力、協力の必要度、自らの費用負担で成立つ内外環境の質への要求度などが、金銭負担の他に見込まれたのであろう。効果を何にとるかは面白いテーマであるが、例示のようにある用地内で分譲しうる総戸数（開発者にとっての直接便益）はその有力な項目であることに違いない。
6. 水環境施設の代替案I U H, N, Aによって開発地区の平均人口密度はどのように変動するか。建物と土地利用の形態は無関係か。低層分散型と緑地内高層型（ユルバニズム的）でI U H型, I U A型の優劣はどう変るか。イエまたは住区内施設の具体的スケッチを添えてご紹介いただけると有難い。

幸い西日本（特に沖縄、香川、愛媛、兵庫、奈良、大阪など）には、古来から使い放題な水が無かったために水を敬して大切に用いる習慣が残っていると推量される。イエ単位、集落単位、ため池利水組合単位での智恵を事物（遺構）、組織、習慣、古老の言などが失われないうちに、衛生工学者の目で集めて次代へ伝承してほしい。本論で希求された環境と人とが共存しうる住い方は、その智恵をいかに現代集落に取り込むかにあると思われる。